



つがるの昔っこ 31 (昔話)

# 猫屋敷①

## (標準語)

国土交通省 東北地方整備局  
岩木川ダム統合管理事務所  
イラスト：やざわ ゆな  
カラーリング：みやかわ みなみ

昔、ある町の大きい宿屋に、お梅という女中がいました。お梅は猫が好きで、タマという猫を飼って可愛がっていました。

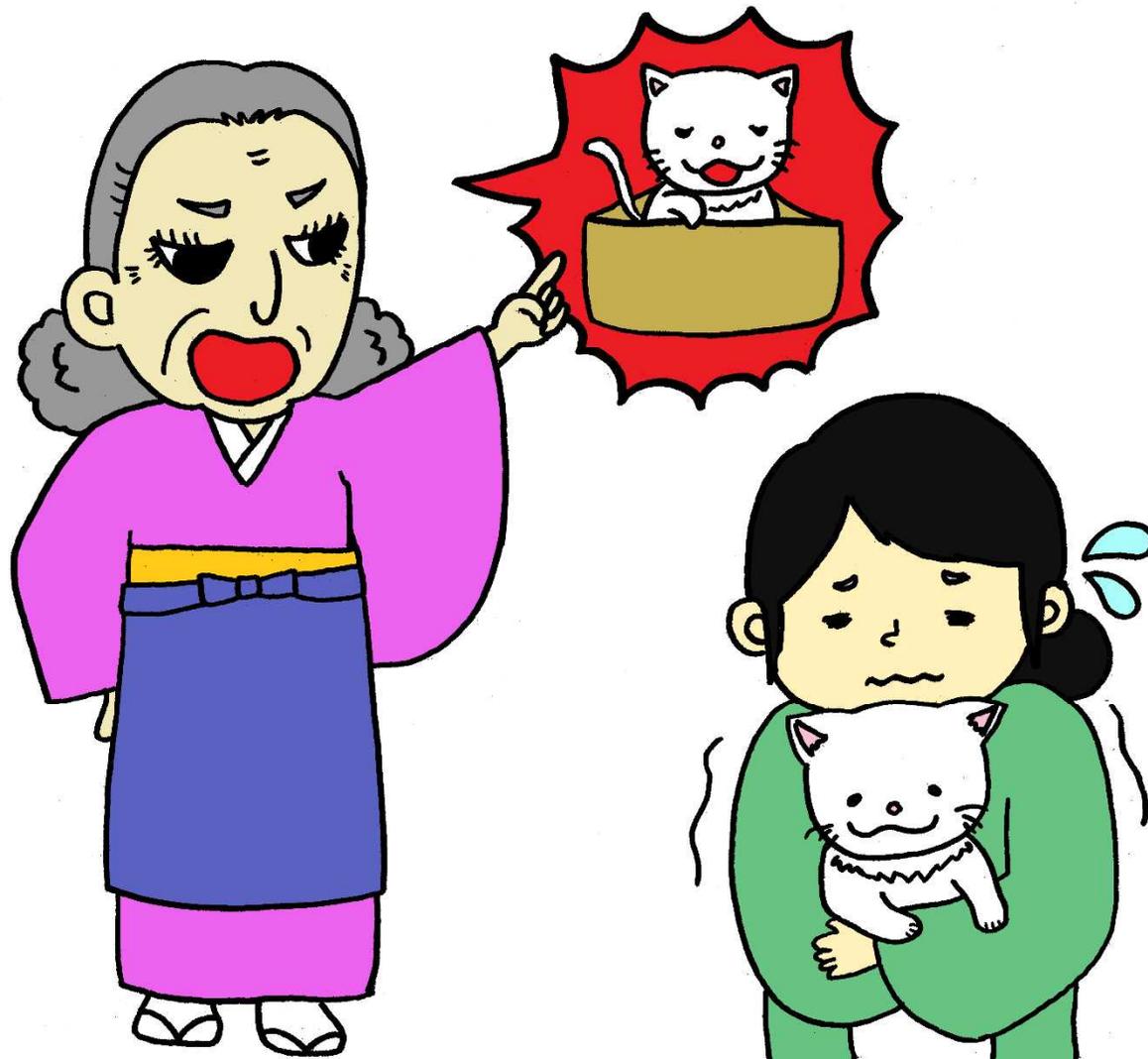
ところが、そこの宿の女将のお杉は大の猫嫌いで、タマが近くに居ただけで、叩いたり、物を投げたりしていました。



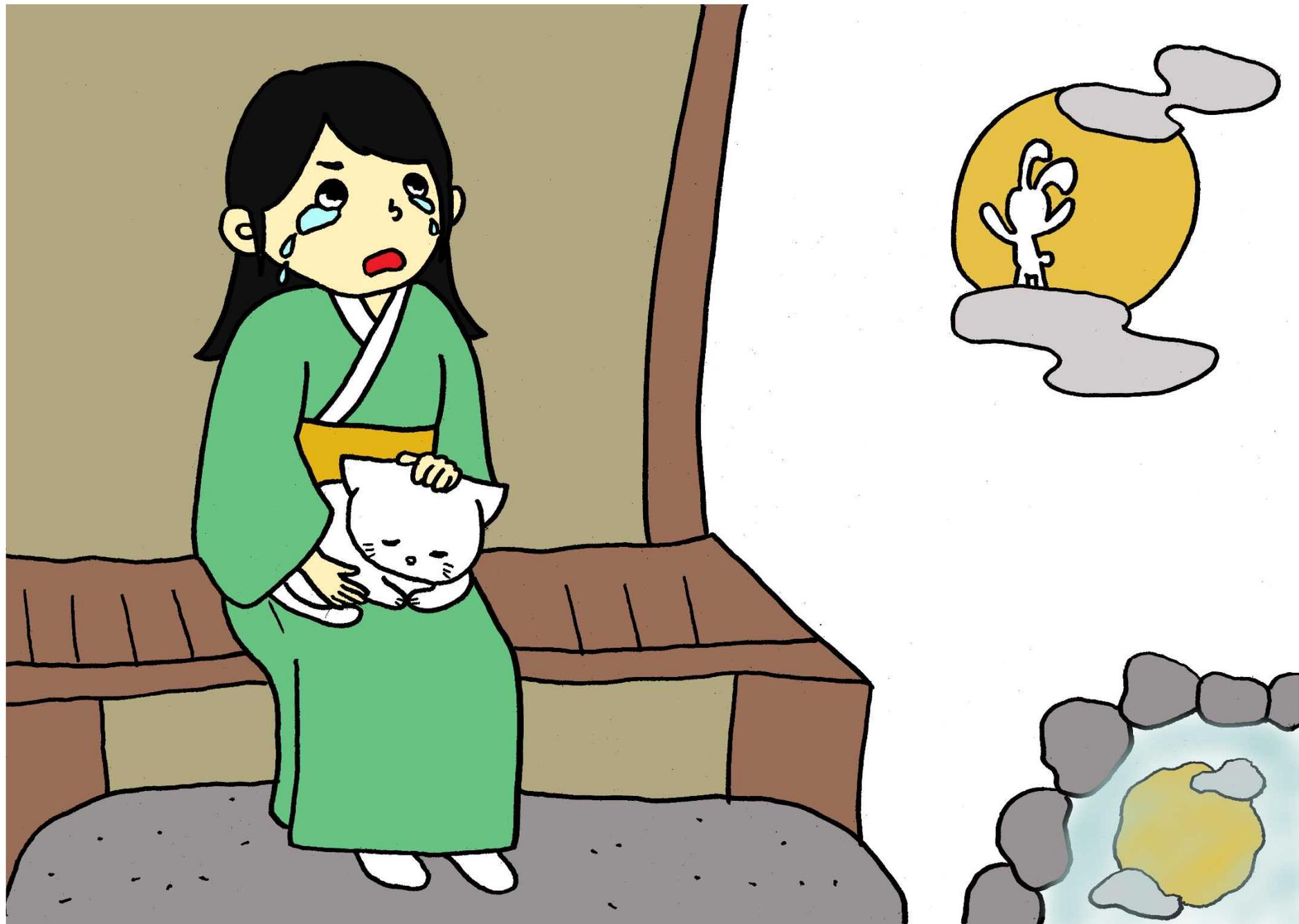
そして『こら、梅、お前は どうして猫なんか飼っているんだ！ さっさとどこかへ捨ててしまえ！』と いつもお梅を怒っていました。

しかし、いくら女将に怒られても、お梅はタマを捨てる ことができませんでした。

お杉は『猫を捨てられないなら、お前にも出て行ってもらうからね。わかったか！』



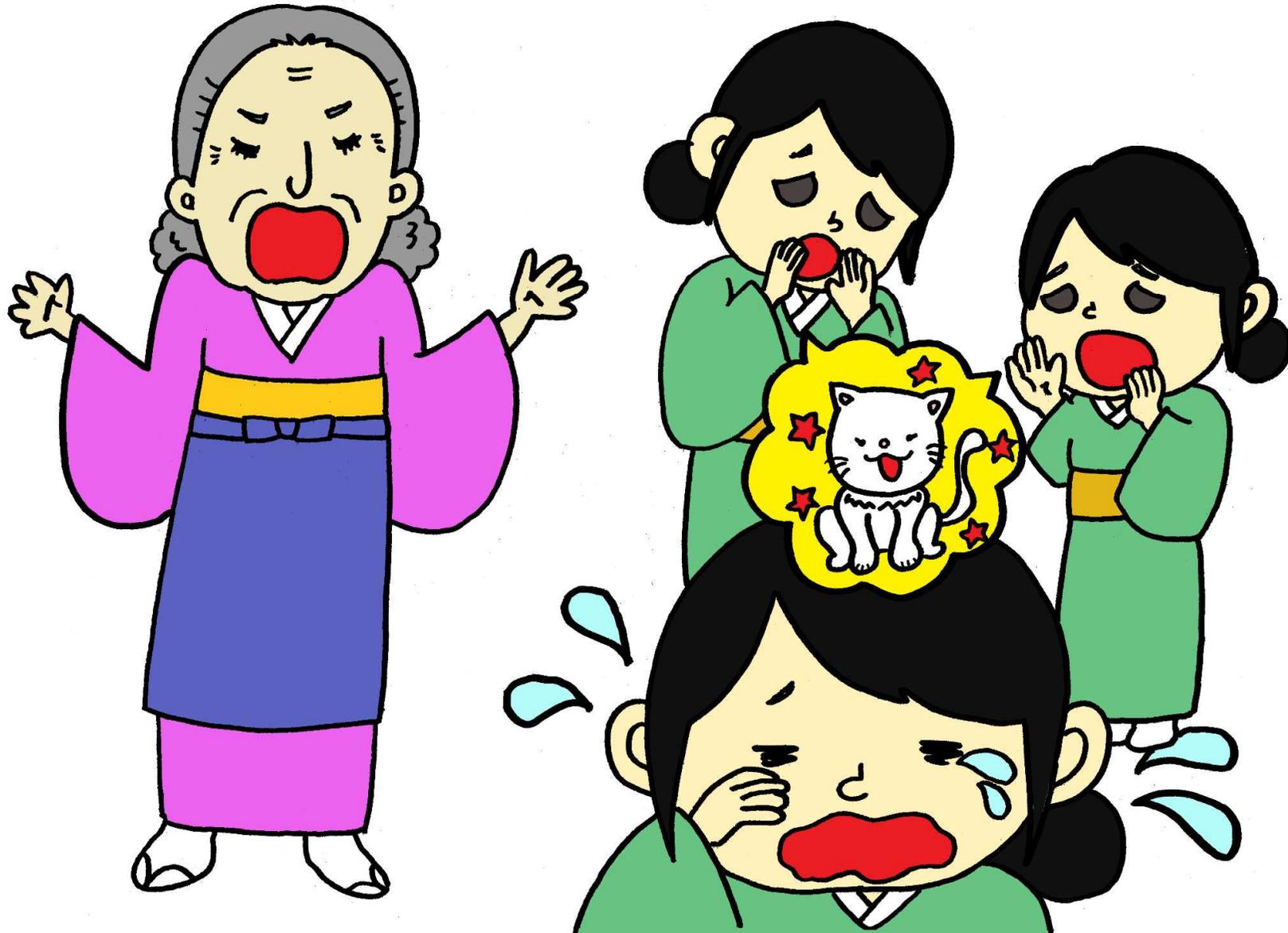
お梅は困り果てて、夜になると裏庭でタマを抱きながら、お月様を見上げて泣いていました。



そうしたら、何があったのか、タマが急に居なくなっていました。

『やれやれ、これでさっぱりした』

お杉は喜びましたが、それから毎日お梅は淋しくて仕方ありませんでした。タマのことばかり考えて、今頃どこかでお腹をすかせていないか、生きているかな、死んでしまったかな、と心配をしていました。



ある日、旅のお坊さんが、この宿に泊まりました。  
お茶を持ってきたお梅を見て『顔色が悪いですね。大丈夫ですか?』と聞きました。  
そこで、お梅は可愛がっていたタマのことを話しました。  
『そうかそうか、あの猫を可愛がっていたのはあなたでしたか。心配しなくても、あの猫は今頃あの山の奥に居て、無事に暮らしていますよ』と教え、なぐさめてくれました。



『え！本当ですか？』お梅はそれを聞くと、どうしてもタマに会いたくなりました。  
そこで、一日だけ休みをもらって山へ出かけました。  
奥へ奥へ入っていったけれど、タマがどこにいるのかさっぱりわかりませんでした。  
あちこち探しているうちに、とうとう日が暮れてしまいました。  
暗くなった山路なので、お梅は怖くて怖くて、一歩も進めなくなってしまいました。



すると、森の奥にわずかに光が見えました。  
『あ！家がある！あそこに泊めてもらおう』と思って、夢中で走って行きました。すると、そこは立派なお屋敷でした。



お梅は不思議に思いながら、思い切って屋敷の門をトントントンと叩きました。  
しばらくすると、一人のお婆さんが出てきました。

お梅はホッとして『私は、猫を探して来たのですが、日が暮れてしまい困っていました。  
どうか、今晚泊めてくれませんか』と言いました。



お婆さんは『何？猫を探しに来たのかい？』と言いました。  
お梅は『そうなんです。。。』と、女将さんとのいきさつなどを色々話をして  
『私、タマがないと淋しくてたまらないんです』と目にたくさん涙をためました。

